

1. 教育の責任

文化、言語の学びを通して、英米文化および日本文化の魅力についてより深い知識と比較の視点を身につけるとともに、グローバルな視野から世界の文化を理解できる国際人としての資質を養うことを目指します。具体的な担当科目は以下の通り。

- 1)「英米文化と翻訳」(演習、秋、2単位、10名)
- 2)「国際文化とクールジャパン」(講義、春、2単位、148名)
- 3)「クロスカルチュラルスタディーズ」(講義、秋、2単位、14名)
- 4)「英語プレゼンテーション」(演習、春、2単位、6名)
- 5)「英語の音声」(講義、秋、2単位、39名)
- 6)「英語の特性」(講義、秋、2単位、28名)
- 7)「英語 I」(演習、春、1単位、22名、29名)
- 8)「名著・名作から人生を考える」(講義オムニバス、秋、2単位、43名)

2. 教育の理念

国際コミュニケーションにおいて共通語である英語の学びを深めるためには、実践的なトレーニング(運用面)に加えて、英語の機能や構造における諸特徴の理解と他言語との比較の観点(言語学的)、更には英語話者の歴史や文化(文化面)に対する幅広い理解が重要です。上記科目のうち、1)2)3)では文化面、4)7)では運用面、5)6)では言語学的な側面にそれぞれ重点を置いた教育に取り組んでいます。日々の授業では、英語に親しみ、そして英語のみならず言語を探究することの楽しさを伝えながら、分析力やコミュニケーション力を伸ばすことに注力し、とりわけ、英文を正確に理解する力と併せて日本語の表現力も十分に養うことを目指しています。社会に出て、自らのキャリアを切り開く上では欠かせない社会人基礎力の一つとして、自分の考えを英語・日本語の双方で明快に伝えられる発信能力が高められることを期待しています。

また、教員自身が企業勤務から大学教員への転職を経験していることから、経営学部で今年度より新規に開講されている8)を担当しています。そこでは、自らのライフストーリーの紹介とさまざまな場面でのキャリア変更の契機となった名著や自身の研究内容を紹介しています。

3. 教育の方法

1) 教員としての目標およびそれに達するための授業実践の工夫

◆**学生の ICT スキルを上げる**> コロナ禍におけるオンライン授業は、2020年度は Zoom、2021年度は Microsoft Teams の Web 会議システムを使用し、ライブ配信型で提供しました。2022年度以降はすべて対面授業で実施していますが、その中でもオンライン授業で得た教育ツールやその他新しいデジタルツールを授業に取り入れるためにも、教員自らも研修等を積極的に利用し自身の ICT スキルのアップグレードを心がけています。デジタルツールを利用する目標を掲げる一方で、安易なコピーアンドペーストの回避や、従来型のノートテイキング(手書き)の学習効果を重視するため、授業の要点や自らの気づき等の情報を整理したノートを提出してもらっています。エルキャンパスを通して、授業内に先週の内容の復習ミニクイズを実施したり、授業後の「ふりかえり(リフレクションペーパー)」を入力したりすることで理解の確認や定着を図ることができています。

◆**チームでの学びを伸ばす**> 講義授業においても、教員の一方的な解説にとどまらないように、少人数クラスでは学生に学期に一度はプレゼンを行なってもらいます。また、大人数クラスであっても、毎回ペアやグループでのディスカッションなどで協働の時間をとっています。このように積極的に他者の学びに触れ、意見交換をすることによって、自らの不足や改善点に気付いてもっと頑張ろうと前向きに思うことができたり、反対に、自分が心配に思っていることは他者も同様であることに気付いて必要以上に心配しなくて良いのだと安堵したり、という経験をすることができています。

◆**比較言語、比較文化の視点を養う**> 教員の専門分野である言語学者の立場から、英語学の概論を扱う授業に加えて、さまざまな科目の英語教材を扱う際にも、英語学に関連する話題を少なからず提供するよう心掛けています。例えば、英語の歴史(外面史としては英語の起源から英語の変化に影響を与えた歴史的事実を概観、内面史としては英語が音・文字・語彙・語義においてどのような変化を遂げてきたのかを概観)、World Englishes と呼ばれる世界の英語のバリエーション、現代英語の音声、意味、文の構造、コミュニケーションのスタイル、第一言語(母語)の発達、第二言語(外国語)学習に関連する話題を幅広く扱います。また、各特徴

において日本語との比較を通して比較言語の視点も養います。更に、英米文化に対する理解を深めるとともに、日本の伝統文化（とりわけ、茶道・書道・華道・俳句などの芸道や日本文化における美意識、年中行事などの慣習）や現代のポップカルチャー（とりわけ、観光地・食・マンガ・キャラクター文化）が欧米ではどのように受けとめられてきているのかを議論しています。そして、文化交流から生まれる豊かさや進歩、魅力について理解を深め、比較文化の視点を養います。併せて、これらの英語表現を学修することで英語力の向上も図ります。

2) 学生への期待、学修成果達成のための工夫

◆**学生自身の目標達成をサポートする**> 語学習得の成功には継続して意欲を持ち続けることが最も重要な要素の一つです。そのため、「自己意識」すなわち自分の学修状況を冷静に見つめて評価できる力を重要視しています。すべての講義・演習科目において、第1回授業でコース説明をしたのちに、当該科目の学修を通しての「自らの目標」を5つ挙げてもらい、その5つの目標を達成するために「具体的に何をするのか」を計画してもらいます。学期中間地点ではそれらの目標を振り返って、自分の学修過程を客観的にモニタリングする機会を作っています。そして、最終的には科目履修後のキャリアアップを見据えて、より長期的な学修目標を設定してもらうことで、今後につなげています。それらの自己意識を教員は観察し、各学生の伸びや躓きに気づいて、細やかなサポートを心掛けています。

◆**他者理解を促す**> 授業内容の理解に対して自分の考えをまとめるだけではなく、チームでの学びを実践しています。これは、他者の優れたパフォーマンスから刺激を受けることだけを意味しているのではなく、他者の誤りに対して、あるいは他者と自分の意見が異なる場合にも、自分の意見を臆することなく発信することができるようになることを目指しているためです。

4. 教育の成果

ここでは、各授業での学生の振り返り記述から教育の成果を総括します。

◆**自由記述欄から学生の率直な意見を確認する**> 学生それぞれの疑問や素直な興味に適切なタイミングで教員が反応するためには、学期末アンケートだけでは不十分であり、各授業で毎回エルキャンパスに振り返り記述を行なってもらいます。最初はなかなか記述できない学生も、回を重ねるごとに、より深い振り返りの記述につながっている様子が見えてきます。これらの取り組みを継続して行うことで、学生が各回の授業内容に対してどのような点に興味を持ち、どんな疑問を抱いているのかがすぐに把握でき、次の授業においてそれらの項目を取り上げたクラス運営を行うことが可能になっています。質問などに対してはエルキャンパスの教材内で回答やコメントをしていますが、クラス全員の振り返りを読んだ後で、全体的な興味の方向性などを踏まえて、クラス全体に対するフィードバックを授業から数日後にエルキャンパスのお知らせに毎回掲載しています。教科書にあるコラムのような読み物の扱いですが、授業と授業の間が一週間ある間に、授業内容に関する教員からのメッセージを受け取る機会があることで、学修内容の復習につながっている様子が見えてきます。

5. 改善への努力と今後の目標

教員の課題の認識としては次の2点にまとめられます。

◆**対面授業でのオンライン授業運営技術の転用と効果検証**> 対面授業の再開後、ライブ配信授業で得た知識や技術、eポートフォリオ化を促進することが対面やハイブリッド型授業（教室と遠隔授業が共存）の授業運営の更なる改善につながると考えます。

◆**成績評価の基準、方法の再考**> 日頃の学修成果を教員学生共に可視化し、理解度、定着度、応用力を測ることができる方法を再考するとともに、各授業において学生それぞれがより深い「振り返り（リフレクション）」をどのように実践していくことができるのか具体的な取り組み方を他の教員と協力しながら検討を進め、適切な方法を見出していきたいと思えます。

【添付資料】

・各科目のシラバス（Universal Passport 参照）